

平成 21 年 6 月 17 日現在

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320100

研究課題名(和文) アジア・アフリカにおけるナショナリズムの比較 - 近現代史研究の視点から -

研究課題名(英文) A Comparative Study of Nationalisms in Asia and Africa: A Perspective of Modern and Contemporary History

研究代表者

長崎 暢子 (NAGASAKI NOBUKO)

龍谷大学・人間・科学・宗教総合研究センター・研究フェロー

研究者番号：70012979

研究成果の概要：

アジア・アフリカのナショナリズムを比較史の立場から考察し、西欧ナショナリズムと異なる側面をもつことが明らかにされた。それは帝国主義支配からの独立、選挙制・民主主義の導入・定着などを実現させたものでもあり、その性格は正負両面から検討すべきだという方向が確認された。また帝国主義諸国など存続する国際関係のなかで成立するものとして上記ナショナリズムを考察する方が説明できる部分が多いことが合意された。さらに上記ナショナリズムが具現化される方法(例えば非暴力)に着目するなかから、21世紀を展望する環境論などの萌芽や、国家を超える文明論的共存関係も展望できることが認識された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
年度			
年度			
総計	8,000,000	2,400,000	10,400,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：比較歴史学・ナショナリズム

## 1. 研究開始当初の背景

1) ナショナリズム研究は、もう、終わりかけているのではないかとホブズボウムなどが論じているがそうだろうか。ヨーロッパに関して言えば、それがある程度妥当かもしれない。しかし、アジア・アフリカにおいては、例えば、アフガニスタン、パキスタン、あるいはパレスチナをみれば、明らかなように、国家に替わる制度が想定されないままで、国

家の成立さえ、危ぶまれる事態が我々を憂慮させている。ヨーロッパと異なり、1940年代後半～5～60年代に殆どの国家が成立したアジア・アフリカでは、いまだ、国家形成、国民形成、すなわち、ナショナリズムの健全な発展が、それぞれの地域の課題でさえある。他方、従来のアジア・ナショナリズム研究は、西欧国家体制(ウエストファリア体制)のなかでの西欧型ナショナリズム研究の延長線上にある。第二次大戦後のアジア・アフリカ

諸国の独立という新現象のなかでのナショナリズムを、比較と関係(交流)の歴史のなかでより深く考察する研究は殆どなかった。

2) 他方、世界のグローバル化にともない、国境を越えて移動する移民たちの活動は活発になり、彼らはかつての棄民的移民でない。例えばインドのIT知的労働者たちは、頭脳還流を試み、二重市民権を獲得する。こうした彼らのナショナリズムとの関係に関する研究も殆どなかった。

3) またナショナリズムとは即ち暴力であるとする理解が蔓延し、ナショナリズムを実現させる方法としての非暴力は、ほとんど研究されていなかった。

4) 最後に移動する人々が携えて行った文化や文明とナショナリズムとの関係、あるいは西欧文明とアジア・アフリカの文明や文化のなかでナショナリズムを考察することもまだ、不十分であった。つまり、アジア・アフリカのナショナリズムは、理論的、比較史的にはまだ、研究の緒についたばかりであり、本研究はこうした欠落を埋めるべく計画されたものである。

## 2. 研究の目的

1) 本研究はアジア・アフリカ諸国の新興・台頭、とりわけ、中国、インドなどのアジアの地域大国の台頭という現実のなかで、そもそも、第二次大戦後、何故インドを始めとするアジア・アフリカ諸国の独立が実現し、国家となりえたのか、という問題設定から、その牽引力たるナショナリズム研究が企図されたものである。その際、アジア・アフリカ地域におけるナショナリズム・国民形成・国家形成をめぐる諸現象を比較・関係・交流という新しい視点から考察することを目的とした。

2) ただし、ウエストファリア体制として17世紀に成立したヨーロッパの国家体制との比較をも念頭におきながら、上記ナショナリズムの特徴と問題点を考察すること。

3) ナショナリズムが表現される方法のなかでも、暴力・非暴力に注意を払い、国家建設という目的とその方法との関係を考究すること。

4) 上記の3角度より、分析することにより、ナショナリズムに関する新しい分析枠組みを構築することを目的とする。

## 3. 研究の方法

1) 近現代歴史研究の方法、すなわち、史料に基づく、実証研究を行う。史料はインド、イラク、ノルウェーなど現地のアーカイヴおよび大英図書館、英国 Public Record Office などにおける近代アジア・アフリカ諸地域史料のコレクションによる

2) それぞれの地域、とくにインド、スーダンその他可能な地域において現地調査/聞き取り調査を行う。

3) それらの調査・研究の成果をもちより、研究会等において、相互に問題提起、議論、論文を参照し合うことにより、上記ナショナリズムの理解の再検討を行う。

4) これらの成果のまとめを議論し、できるだけ早い時期に公刊し、成果・情報の共有化を図る。

## 4. 研究成果

( ) 組織的な史資料収集、現地調査、現地研究者との交流、アジア・アフリカの比較研究の試み

初年度に、東京大学教養学部において、長崎暢子「南アジアのナショナリズムの特徴」、および三谷博「日本のナショナリズム」の2つの発表を行うとともに、(A) 本科研をどのように遂行していくかの方法論、(B) どのような形で成果を出すか、の2点にしばり、議論する研究会を行った。

本研究メンバーは、日本(三谷博)、中国・東アジア(並木頼寿)、南アジア(長崎暢子)、中東(酒井啓子)、西アジア・アフリカ(栗田禎子)、政治理論(清水耕介)の諸地域およびディシプリンの、すでに実績をもつ、専門研究者である。アジア・アフリカの重要な地域をほぼ、網羅している。そのため、それぞれの専門分野に関し、各自が専門地域に関する調査・研究をおこない、それにもとづき、随時、論稿を作製して研究会もしくは、メールによる発送、意見の交換を行い、ならびに、随時、個別に討論のための機会をもち、比較の土台をつくることを決めた。これによって研究の目的であるアジア・アフリカのナショナリズム研究枠組みの再構築を達成しようとする意思の一致を見た。

この方針は三年間保持された。(ただし、健康上の理由から並木は最終年度に研究分担者から外れた。)

上記方針に基づき、(A) 第一年度は、主として必要史資料の収集、および、南アジ

アで長崎暢子（インド）、三谷博（中国・韓国）が現地調査を行った。また、かならずしも本科研の費用ではないが、それぞれが現地調査を実行した。その結果、諸地域のナショナリズムの基礎的な特徴をある程度、相互に掌握することができた。比較、理論の土台（国家の性格、ナショナリズムの行動パターン、民主主義との関係、対外関係と当該地域のナショナリズムの行動等との関係など）に焦点をあてつつ、比較を行っていくことが決められた。

第二年度である2007年4月28日には龍谷大学において、酒井啓子「イラクにおけるナショナリズム」、小泉順子（京都大学）「タイにおけるナショナリズム」、ディスカッサント三谷博により、研究会を行った。ついで、7月7日東京大学教養学部において、清水耕介「ナショナリズムとフーコーの権力過剰概念について」、栗田「スーダンにおけるナショナリズムをめぐって」による研究会を行った。

それ以外に、長崎（インド（グジャラート）、清水（アメリカ（サンフランシスコ）、三谷（アメリカ））などにおいて、当該資料館を訪問、資料（含むマイクロフィルム）の購入、現地での聞き取り調査を行い、海外協力者とのより緊密な意見交換を行った。また、2007年11月15日～19日にはインドニューデリーとコルカタにおいて長崎暢子は「Rash Behari Bose: Between Nation and "People's Asia"」と題する講演会とセミナーを行い、日本とインドとの関係のなかでのナショナリズムの形成について、インドの人々との意見交換をおこなった。

最終年度の主な活動は、長崎暢子による大英博物館（India Office）、インド・Gujarat Vidya Pit（グジャラート州立大図書館）などにおける史資料調査、三谷博によるハーバード大学における研究、清水耕介による北欧デンマークにおける調査、研究、栗田禎子によるスーダンの調査などである。これらを踏まえて、国内外の史資料の最終的購入と整理を行い、報告書のための論文執筆を中心的課題とした意見交換を重ねた。以下ではこうした議論に関する長崎の理解を中心に述べる。

#### （ ）アジア・アフリカのナショナリズム研究枠組みの再構築

上記の（ ）の活動のなかから、アジア・アフリカのナショナリズム研究の枠組みに関しては、「西欧のナショナリズム形成とのアナロジーによるアジア・アフリカのナショナリズム形成論」とは異なった要素によって説明できる部分が多いことが了解されてきた。

例えば、キリスト教世界のなかからウエストファリア体制として成立する西洋国家体制は、人間の生命の永続性を永遠なる国家が保障する役割を担うのだ、とアンダーソンは説明する。しかし、帝国主義諸国からの解放闘争のなかから出現するアジア・アフリカ諸国家は、異なる生命観、生死観の伝統、思想・宗教、神話をもつ幾つかの文化圏に属する。人間の生死を司る単一の司祭の役割を、国家に期待するとは限らないであろう。つまり、アジア・アフリカのナショナリズム形成に関しては、異なる説明が必要とされている。例えば、それは、帝国主義諸国群、もしくは三谷博の言葉を借りれば、隣接の「忘れえぬ他者（この場合は、日本にとっての中国）」といった「他者との関係」で説明できる部分が大きい、という仮説も有力なひとつである。つまり、アジア・アフリカのナショナリズム研究の枠組みは再構築されることが可能である。

#### （ ）ナショナリストの運動における方法への着目から見えるもの

（ ）アジア・アフリカのナショナリズムの検討のなかで、私たちは、特異な例に注目した。すなわち、ガンディーの指導下に南アフリカのインド人種差別撤廃運動、およびインドにおける反英運動が展開されるときに、採用された非暴力という方法である。多くのナショナリズムが暴力と結びついて理解される中で、インド独立の実現は、イギリス兵の一人の命を失うことがない「非暴力」的方法により、達成された。非暴力の有効性は再考されるべきであるが、問題はその研究の方法論である。研究自体が、インドのナショナリズムの目的を検討するのではなく、「方法」に着目し、「方法」を検討する、新しいやり方が必要であった。何故なら、ガンディーの運動自体が、独立国家の実現という目的よりも、そこに至るために使う方法（非暴力）をより重視せよ、という明確な態度をもつきわめて特異な実践だったからである。結果はインドという独立国家の実現に成功したのであったが、問題は何故非暴力という方法に固執したか、である。その背景には、インドの伝統思想、とりわけジャイナ教が持つ「真理の多面性」という真理観がある。つまり、敵対する相手も、一片の真理を保持している可能性があるとする多面的な真理観である。このため、敵対者を暴力的に抹殺することは、真理の実現の可能性を最終的に奪ってしまうとして、自ら非暴力という方法を堅持するのである。「真理の多面性」なる真理観は19世紀以来の西欧近代における一元的真理観と明らかに異なる。言い換えれば、当時の一元的西欧的

秩序観に挑戦しつつも、大川周明的な、もしくは日本のアジア主義のような東西対抗史観ではない。インドのナショナリズムのなかに、多元的共生の世界が展望されていたことがインドという国家の独立をもたらした一因とみることもできよう。ガンディーの「ナショナリズム」はまた、単にインド独立を最終目標としたものではない。南アフリカにおける移民としての生活も長かったためか、ガンディー闘いは最終的には、大英帝国に代表される近代西欧文明に対するものであった。彼の名著「ヒンド・スワラジ」(1909年刊)は、人間の肉体的欲望の解放を謳う近代文明を根底から批判したのもでもあり、現在の環境論とつながる思想としても知られている。このように、アジア・アフリカのナショナリズムのなかに、21世紀に有効性をもつ豊かな思想がまだ多く発掘を待っているのであり、その一端を発掘したことを本研究は重視し、成果と考える。

#### 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者に は下線)

##### [雑誌論文](計21件)

Kosuke Shimizu, "Nishida Kitaro and Japan's Interwar Foreign Policy: War Involvement and Culturalist Political Discourse", Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Working Paper Series, 44 巻, 掲載確定, 2009, 査読無

酒井啓子, The Compass 中東の「民意」と国際社会との対話, 週刊東洋経済,

3月(6192)巻, pp.118-119, 2009, 査読無

酒井啓子, The Compass 見たくないものは消すという恐るべき発想, 週刊東洋経済, 1月(6184)巻, pp.110-111, 2009, 査読無

栗田禎子, 「移行期」のスーダン政治 - 南北和平・民主化・ダルフール危機, 『地域研究』, 第9巻1号, pp.68-89, 2009,

査読有

栗田禎子, 「テオドール・ロートシュタインに関する覚書 - エジプト民族運動・イギリス労働運動史・ソヴィエト外交」, 『イスラーム地域研究ジャーナル』早稲田大学イスラーム地域研究機構, vol.1, pp.37~44, 2009, 査読無

長崎暢子, 「ラース・ピハーリー・ボース - 国家と『人々のアジア』のあいだで - 」, 前田専学監修『インドからの道、日本からの道』出帆新社, pp.221-242, 2008, 査読有

長崎暢子, "Rash Bihari Bose: Between Nation and "People's Asia" in Path From India, Path from Japan; Lecture Series on India-Japan Relations", Northern Book

Centre, New Delhi, pp.192-211, 2008, 査読有

酒井啓子, "Preface (Special Issue I Role of Electoral System in Non-Democratic Regimes)", 日本中東学会年報, 24-1 巻, pp.191-195, 2008, 査読有

酒井啓子, "Stubborn Authoritarianism through the Parliamentary System: The Case of Iraq under the Ba'ath Regime (Special Issue I Role of Electoral System in Non-Democratic Regimes)", 日本中東学会年報, 24-1 巻, pp.197-227, 2008, 査読有

酒井啓子, The Compass イラク政治再編で行き先不透明, 週刊東洋経済, 12月(6178), pp.100-101, 2008, 査読無

酒井啓子, The Compass 人道支援であってもはや安全でない, 週刊東洋経済, 11月(6171), pp.140-141, 2008, 査読無

酒井啓子, The Compass 大陸進出のためだった日本イスラーム研究, 週刊東洋経済, 9月(6163), pp.140-141, 2008, 査読無

栗田禎子, 「スーダン情勢の構造と自衛隊派遣問題」, 世界, 9月号, pp.29-32, 2008, 査読無

酒井啓子, The Compass メディアが作った中東イメージを疑え, 週刊東洋経済, 8月(6156), pp.134-135, 2008, 査読無

酒井啓子, The Compass 難民問題はアフリカだけのことなのか, 週刊東洋経済, 6月(6149), pp.118-119, 2008, 査読無

酒井啓子, The Compass 優先された政治判断、派遣論議の検証を, 週刊東洋経済, 5月(6141), pp.166-167, 2008, 査読無

長崎暢子, 「トランスナショナル化する在外インド系ネットワーク」, 21世紀フォーラム, 106, pp.16-22, 2007, 査読有

長崎暢子, 「ガンディーのサッティヤグラハ(非暴力的不服従運動)について」, 「脱植民地化地域における政治と思想」(平成15-18年度科学研究費基盤研究(A)(1)研究成果報告書・代表若林正文), pp.247-260, 2007, 査読無

Nobuko Nagasaki, Hisashi Nakamura, Tosei Sano, "Proceedings of the First AFC International Symposium: The International Context of Conflicts in the Middle East and Asian Approaches to Conflict Resolution, 4-5 March 2006", Afrasia Symposium Series 1 Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku University, Series 1, pp.229, 2007, 査読無

長崎暢子, "Satyagraha as a Non-Violent Means of Conflict Resolution", Working Paper 3. Afrasian Centre for Peace and Development Studies, Ryukoku University, 3, pp.21, 2006, 査読無

21. 長崎暢子, "The international Impact of the Provisional Government of India: The Japanese Response to Bose's Initiative during the World War", *Journal of the Socio-Cultural Research Institute, Ryukoku University*, vol.8, pp.275-294, 2006, 査読有

[学会発表](計15件)

長崎暢子, 講演「南アジアから見るユーラシア地域大国の比較研究」, 新学術領域研究『ユーラシア地域大国の比較研究 第1回全体集会』, 2009年3月4日, 北海道大学

長崎暢子, "Gandhi and Ruskin, in Labour-intensive Industrialization in South and Southeast Asia: Proceedings of the Joint Workshop", Joint Workshop on Labour-Intensive Industrialisation in South and Southeast Asia, 2008年12月20日-21日, Kyoto University

Kosuke Shimizu, "The Kyoto School Philosophy and International Relations: Subject, Universality, and War Involvement", MEARC Lecture Series, 2008年12月4日, Leiden University

長崎暢子, 基調講演「国際文化学と戦争 - 日本におけるフィールド調査の一事例から - 」, 第二回国際文化学会大会, 2008年12月3日, 龍谷大学瀬田学舎

栗田禎子, スーダン国内の「周縁化された諸地域」に対する弾圧の歴史とその克服の展望, 日本国際政治学会2008年度研究大会(「人権侵害と国家責任の比較研究」部会), 2008年10月26日, つくば国際会議場

Hiroshi Mitani, "East Asian Regional History: Problems and prospects", Kyujanggak Symposium, 2008年10月17日, Seoul National University

Hiroshi Mitani, "Contemporary Political Context of the Historical Issue in East Asia", Historical Dialogue and Reconciliation in East Asia: Recent practice and future prospects, 2008年9月12日-13日, Harvard University

Sakai Keiko, "Stories of Our Boys, but for Whom? The Japanese Media's Coverage of the SDF in Iraq", AFMA (アジア中東学会連合) 第7回研究大会, 2008年9月6日, ウランバートル・モンゴル国立大学

栗田禎子, 栗本英世, 岡崎彰, 「スーダン情勢に関する緊急研究集会」の組織及び報告, スーダン情勢に関する緊急研究集会, 2008年7月28日, 学術総合情報セ

ンター

栗田禎子, 「スーダンというトポス - 植民地支配・周縁化・革命」, 千葉県高等学校教育研究会 歴史部会研究大会記念講演, 2008年6月27日, 千葉県立中央博物館

Hiroshi Mitani, "Toward a Historical Dialogue and Reconciliation in East Asia: My Voyage from Ealham.", Jackson H. Bailey memorial Lecture, 2008年4月14日, Ealham College, IN.

三谷博, "Creating a Public Sphere in Societies Lacking a Strong Liberal Tradition: the Japanese experience from a comparative perspective.", The Council on East Asian Studies, 2008年3月25日, Yale University

Nagasaki Nobuko, "Equal Partners to be", South Asian History Conference (Netaji Research Bureau), 2008年1月23-24日, Kolkata

長崎暢子, 「二人のボース」日印友好年実行委員会, 2007年11月16-19日, ニューデリー (India International Center)

三谷博 (組織・司会), 「球からみた世界史」, 史学会, 07年11月17日, 東京大学人文社会研究科

[図書](計10件)

酒井啓子, 『日本の国際政治学三 地域からみた国際政治』第6章 中東の国際政治 - 他者に規定される地域の紛争 -, 2009, 有斐閣, 270頁

Francois Debrix, mark Lucy, Kosuke Shimizu, et.al. "The Geopolitics of American Insecurity: Terror, Power, and Foreign Policy", Routledge, 2009, 219頁

Hiroshi Mitani, "Escape from Impasse: The Decision to Open Japan, revised and expanded edition", Tokyo: I-House Press, 2008, 356頁

Hiroshi Mitani, "The History Textbook Issue in Japan and East Asian, in East Asia's Haunted Present (edited by Tsuyoshi Hasegawa and Kazuhiko Toko)", West Port, CT: Praeger Security International, 2008, 256頁

酒井啓子, 『イラクは食べる』, 2008年, 岩波書店, 242+x頁

長崎暢子, 田中敏雄, 中村尚司, 石坂晋哉 編, 資料集「インド国民軍関係者覚え書き」, 2008年3月, 研文出版, 430頁

長崎暢子, 田中敏雄, 中村尚司, 石坂晋哉 編, 資料集「インド国民軍関係者証言」, 2008年3月, 研文出版, 630頁

三谷博, 金泰昌 編, 「東アジア歴史対話」, 2007年, 東京大学出版会, 364頁

三谷博,「歴史教科書問題」,2007年,日本  
図書センター,384頁  
三谷博,「超越国境の歴史認識」,2006年,  
社会科学文献社,337頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長崎 暢子(NAGASAKI NOBUKO)  
龍谷大学・人間・科学・宗教総合研究セ  
ンター・研究フェロー  
研究者番号:70012979

### (2) 研究分担者

並木 頼寿(NAMIKI YORIFUSA)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:80155986  
2008年度のみ連携研究者

三谷 博(MITANI HIROSHI)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号:50114666

酒井 啓子(SAKAI KEIKO)  
東京外国語大学・地域文化研究科・教授  
研究者番号:40401442

栗田 禎子(KURITA YOSHIKO)  
千葉大学・文学部・教授  
研究者番号:10225261

清水 耕介(SHIMIZU KOUSUKE)  
龍谷大学・国際文化学部・准教授  
研究者番号:70310703